World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第22回

和僑世界大会で見たもの、感じたもの

須賀　　努
コラムニスト・アジアンウオッチャー

皆さんは海外に『和僑』という人々がいるのをご存じだろうか？　そう、『華僑』の日本人版と言えばわかるだろうか。海外に渡って現地に根を下ろした日本人、以前は『日本で失敗したので海外で一旗揚げよう』『駐在員だが日本に帰りたくないので脱サラした』といったイメージがあったが、現在は積極的に、前向きに海外で、アジアでの起業を目指す日本人が増えている。そんな活動にも注目してみる必要があるのではないだろうか。今回は和僑総会に参加して感じたことを綴りたい。

和僑会

海外で起業した人々が集まる和僑会という組織がある。2004年に香港で設立され、現在は北京・上海・深圳など中国各地、またバンコック・シンガポールなど東南アジア各地にも和僑会が設立され、現地で起業した日本人達が集い、情報を交換し、悩みを分け合い、共にビジネスを発展させる、緩やかな連携を持つ組織となっている。

華僑の場合は『地縁』『血縁』により、各地に出身地毎の同郷会があるのとは異なり、日本人という１つのキーワードで繋がっている点に特徴がある。

写真１　開会挨拶するタイ和僑会谷田貝代表幹事

後から来る者の支援もしようということで、東京他、日本各地にも和僑会が設立されている。普段は各地域で勉強会、親睦会などの活動を行っており、中には留学生の為に和僑塾を開き、会員が講師となり、未来の和僑を育てているところもある。そして年１回会員が集まる総会、和僑世界大会が開催されている。

手弁当の大会準備

その和僑総会が2013年はタイの首都バンコックで開催された。前年シンガポール大会の直後にタイ和僑会では世界大会実行委員会を立ち上げ、１年かけて準備してきた。基本的に和僑会は『相互支援』を目的とした緩い繋がりの団体であり、専任の事務局もなく、全ては会員の手弁当で準備がなされた。

大会では各種セミナーの開催に合わせて講師を準備し、初の試みである物産展も設置、1000名ものお客を迎える大きな大会の準備を基本的には個人事業主である会員が、自分の事業もそっちのけで、直前は徹夜で準備している姿を見た。これは正直大学の学園祭のノリであったが、自らの事業の利益を最優先してもおかしくない海外で起業する日本人がこれほどに団結し、１つのことに当たるのか、これらの準備過程を見て、思わず『このエネルギーが海外で起業する人々の支えなのだ。今の日本人に必要なのはこのパワーだ』と勝手に思ってしまった。

そしてもう一つ、大会のお手伝いとして、タイに留学している日本人留学生を招集したことは、和僑会の理念の１つである、『後から来るものを支援す

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

る』活動として、大いに意義があった。昨今叫ばれているグローバル人材、先ずは海外で起業した先輩たちの背中を見ることから始まるような気がした。

多彩なセミナーで得たもの

大会中は多数のセミナーが組まれ、参加者の自己啓発が図られた。大前研一氏の基調講演は、世界情勢を紹介し、『和僑の皆さんは一歩踏み外した人たち』と笑いながら、自ら起業する者たちへエールを送っていた。『戦前は食い詰めたら海外に移住したものだが、今は政府に金を貰いに行く時代』そんな中で和僑の心意気は評価できる。

今やタイを代表する企業家、タイ茶飲料の革命児であるイチタン社のタン社長の講演を聞きに行くと、何と最初から Q&A 方式。『現地の一般人の生活が理解できなければ、売れる商品など作れない』と日本企業には相変わらず厳しいタン社長。現地に深く根差した和僑については、『小さな規模から手堅く始めよ』とアドバイス。

そして直接ビジネスとは関連がなさそうだった、ミャンマーで無償医療を続ける日本人医師、吉岡秀人氏の『欧米企業は我々の事業内容を評価して、きめ細かく支援してくれるが、日本企業にはそれがない』という言葉が胸に響いた。実は海外で高い評価を得ている事業をしている日本人を数人知っているが、全員が口をそろえて『日本政府と企業の援助資金ほど使い勝手の悪いものはない』と言っていたから。

日本人は和僑の精神を顧みて、そしてもっと彼らのとの距離を詰め、その事業内容を評価し、自らのアジアビジネス展開にもっと活用すべきではないか。中国同様、アジアでも『本当に売れる商品を開発し、そして現地で売っていく』ためには、現地人と和僑の智慧が必要ではないかと思う。

人はタイで熱くなる

今回の総会のスローガンは『人はタイで熱くなる』。元々タイは暑いじゃないか、などと軽口を叩いていたが、総会当日、本当に熱くなっている人々を多数みて驚いた。初めて設置された物産展には100ものブースが出店し、遠く日本からも売り込みに来ている姿を見て、『アジアの時代』を実感した。

そして何より、大会の２日目午後に行われたドリームプラン・プレゼンテーション（通称ドリプラ）。自らの夢を大人が語るこのプレゼン。プレゼンターが夢を語りながら泣き、聴衆も聞きながらハンカチで目頭を押さえる。和僑総会主催者が号泣する姿を見るに至って、なぜ今ドリプラが熱い支持を受けるのか、そして今の日本に必要な物が何か、分かったような気がする。

それは『自分を信じること』『人に頼らないこと』。自らを信じて海外へ飛び出し、起業する。それこそまさにドリームプランであり、そのハードルは決して高くはないということだ。我々は政府などに頼らず、組織にも頼らないで、自ら生きる道を探さねばならない。たくましい和僑はそれを教えてくれた。

写真２　自らの夢を語るプレゼンター達